

《タイ》スラユット暫定内閣： 閣僚プロフィール(上)

内閣の成立経過

① [2006年10月1日] 9月19日の軍事クーデターで実権を掌握した民主改革評議会(CDR: 現・国家治安評議会〔NSC〕)はスラユット前枢密院議員(退役大将)を暫定首相に指名。スラユット氏は同日中にプミポン国王による認証式を経て首相に正式就任した。

② [10月8日] 国王はスラユット新首相が提出した組閣名簿を承認。

③ [10月9日] スラユット暫定内閣はプミポン国王の御前での閣僚宣誓式を経て正式発足。同内閣は、新憲法の制定後の来年10月を目処に実施される総選挙で新政権が樹立されるまでの暫定政府として機能する。

<閣僚構成>

■副総理大臣: 2人(プリディヤトン財務相、コーシット工業相が兼任)

■大臣: (首相を除き)21人

□副大臣: 5人

■首相 Prime Minister

スラユット・チュラノン(大将)

Gen Surayud Chulanont

▼データ→(2006年10月15日号本欄を参照)

■第一副首相兼財務相

First Deputy Prime Minister and Finance Minister

(モム・ラチャウォン)プリディヤトン・テーワクン

M.R. Pridiyathorn Devakula



米国でMBAを取得した王族(M.R.)出身の金融・財政テクノクラート。縁戚のラムサム財閥が経営するタイ農民銀行(現・カシコーンバンク)に20年間勤務(最終ポストは副頭取)。その後、タイ輸出入銀行総裁時代の1997年に発生したアジア金融危機では、タリン財務相(当時)と中銀との間の政策調整役を果たし、危機からの回復に大きく貢献した。2001年には、タクシン前首相から

その能力を買われて、タイ中銀総裁に抜きさされた(ただ、タクシン前政権とは距離を置き、中銀の独立性堅持に努めた)。銀行家としても組織管理者としてもタイの第一人者との評価を内外の金融・財政専門家から得ている。

同じく経済界からの信頼が厚いコーシット副首相兼工業相と二人三脚で暫定政府の経済政策全般を統括する。また、第一副首相として、スラユット首相が外遊などの際は「首相代行」を務める。

▼データ: 【年齢】59歳(1947年7月15日生まれ) 【学歴】1968: タマサート大学経済学部卒(最優秀成績)。70: (米)ペンシルバニア大学(ウォートン・スクール・オブ・ファイナンス)でMBA(経営学修士号)取得。89: タイ国防大学学位取得。【経歴】1971: タイ農民銀行入行(国際部)。76: 同部次長。77: 事業開発部長。79: 国際部長兼コンピューター部長。83: 同行取締役。85: 同行執行副頭取。90: [12月](チャチャイ政権)政府スポークスマン(-91年2月)。91: [7月](アナン暫定政権)副商業相。92: [4月](スチンダ政権)副商業相、[6月](第2次アナン暫定政権)副商業相(-10月)。93: [10月]タイ輸出入銀行総裁。2001: [5月]タイ中央銀行総裁。06: [10月9日](スラユット暫定内閣)副首相兼財務相(同17日に第一副首相に任命)。

【横顔】中銀総裁時代には、時折バイクで出勤するなど気さくな一面を見せた。反面で、そうした個人的な行動にも綿密な計算を働かせている知略家だとの評もある。

■副首相兼工業相

Deputy Prime Minister and Industry Minister

コーシット・パンピアムラット

Kosit Panpiemras



国家経済社会開発委員会(NESDB)の要職を歴任し、86年に同委員会事務局次長。90年代にはアナン暫定政権、バンハー

ン政権、チャワリット政権でいずれも短期間ながら農相、工業相、財務相に就任した。99年から現職就任まではバンコク銀行会長。

元来、地方経済・社会開発の専門家であり、バンコク銀行会長としても農業技術の発展・普及を目的とする「近代農業プロジェクト」を実施するとともに、様々な中小企業支援プログラムも導入した。こうした経験と知識が、プミポン国王の提唱する「自足経済」の理念を経済政策に取り入れようとするスラユット首相に高く評価されたようだ。金融・財政などマクロ経済面で采配を振るうプリディヤトン副首相兼財務相とタッグを組んで、暫定政府の経済政策を統括・調整する(政府政策策定委員会委員長を兼任)。

▼データ: 【年齢】63歳(1943年5月28日生まれ) 【生地】バンコク 【学歴】1963: チュラロンコーン大学経済学部卒(優等)。65: (米)メリーランド大学で経済学修士号(MA)取得。88: タイ国防大学学位取得。【経歴】1965: 国家経済社会開発委員会(NESDB)上級エコノミスト・財政計画課長。72: 国際復興開発銀行(IBRD: 世銀)カントリー・エコノミスト(ワシントンDC)(-74)。76: 国家地方開発調整センター(NRDC)開発研究部長(-82)。80: (プレム)首相顧問(-88)。82: NESDB事務局局長補佐。86: 同事務局次長(-92)。91: [3月](第1次アナン暫定政権)副農業・協同組合相。92: [4月](スチンダ政権)首相府官房長、[6月](第2次アナン暫定政権)農業・協同組合相(-9月)。96: [9月](バンハーン選挙管理内閣)工業相(-11月)。97: [10月](第4次チャワリット内閣)財務相(-11月)。99: [1月]バンコク銀行会長。2006: [10月9日](スラユット暫定内閣)副首相兼工業相(同10日に政府政策策定委員会委員長に任命)。【家族】既婚。子供4男。

【横顔】実直かつ先見性のあるエコノミスト兼政策立案者として知られ、1997年のアジア経済・金融危機の発生を“予言”したことで知られる。9月軍事クーデターの“後ろ盾”とされるプレム枢密院議長(元首相・元陸軍司令官)と親密であり、80年から8年間続いたプレム政権時代を通じて首相の経済顧問を務めた。

■首相府相

PM's Office Minister

(クンジン)ティパワディー・メーカサワン
Khunying Dhipavadee Meksawan

米ハーバード大学で修士号を取得した才媛で行政改革の専門家。スラユット首相からは「官吏のプロフェッショナリズム、効率、それに正直さを高めるための行政改革」を託された。

▼データ：【年齢】60歳。【学歴】(米)ハーバード大学で修士号(公共管理学)取得。【経歴】首相直属機関である文民公務員委員会(CSC)に長年勤め、女性として初めて同委員会事務局長に任命され、タクシン前政権下での省庁再編に尽力。2002年には、新設された情報通信技術省の初代次官に抜てきされた。04年に文化省次官に異動。今年パリで開催された「タイ・フェスティバル」の運営を指揮したのを最後に定年退官。2006：[10月9日](スラユット暫定内閣)首相府相。

■首相府相

PM's Office Minister

ティーラバット・セーリーランサン(博士)
Dr Thirapat Serirangsan

「高齢者内閣」(閣僚の平均年齢は63歳)と皮肉られるスラユット暫定内閣では最年少の51歳。政治学者に転じた元ジャーナリスト。最近までタクシン前政権を厳しく批判する政治評論でメディアに連日登場。特に、前政権の汚職や不正を独自に調査し公表するサイト「www.corruptionwatch」は前政権に脅威を与えた。現職での所管官庁は広報局(PRD)と国営メディア会社MCOT(旧マスコミ公社)で、首相府の法制分野も担当する。

▼データ：【学歴】チュラロンコーン大学で政治学博士号取得。【経歴】1998年7月、(タクシン前政権の与党)タイ愛国党(TRT)の創設者の一人となったが、2001年総選挙の直前に離党。のち、スコタイ・タンマティラート大学政治学部長。タイ政治学協会会長。2006：[10月9日](スラユット暫定内閣)首相府相。

■国防相

Defence Minister

ブンロート・ソムタット(大将)
Gen Boonrawd Somtas



退役陸軍大将。元国軍総参謀長。スラユット暫定首相とは、国軍士官学校予科および陸軍士官学校の同期生であり、現役軍人時代を通じて親友の間柄。9月の軍事クーデター発生前までは毎週のゴルフ仲間でもあった(首相は自らが最も信頼できる人物に国防相の重責を託した形である)。現職で取り組むべき2つの重要課題は、タクシン前首相が行った縁故主義人事の故に相互の信頼が失われた国軍将兵に団結を取り戻すことと、最南部の治安問題の解決である。

▼データ：【年齢】63歳。【学歴】国軍士官学校予科卒(第1期生)。チュラチョムクラオ王立陸軍士官学校卒(第12期生)。陸軍参謀学校卒。仏陸軍参謀学校に留学。【経歴】特殊部隊下士官。ベトナム派遣軍に参加。第二特殊戦師団長。1999：陸軍参謀長。2002：国軍総参謀長。04：定年退官。06：[10月9日](スラユット暫定内閣)国防相。

【横顔】同(ブンロート)氏とスラユット首相の国軍での経歴は実によく似通っている。①予科、陸士、陸軍参謀学校で同期生。②陸士を優秀な成績で卒業し海外の陸軍参謀学校に留学(同氏はフランス、首相は米国)。③インドシナ戦争での戦闘に従事(同氏はベトナム、首相はラオス)。④同時期に特殊戦師団長に就任(同氏は第2師団長、首相は第1師団長)。⑤同氏は陸軍参謀長と国軍総参謀長を歴任し、首相はほぼ同時期に陸軍司令官と国軍最高司令官を歴任。⑥同年(04年)に定年退官。

■外相

Foreign Minister

ニット・ピブーンソンクラーム
Nitya Pibulsonggram



蝶ネクタイがトレードマークのキャリア外交官。外務省の局長ポストなどを歴任し、駐米大使から外務次官に登りつめ定年退職した典型的なエリート官僚でもある。一等書記官時代から駐米経験が豊富であり、欧米諸国の外交関係者との人脈が生かされることから、スラユット暫定政府の“非民主的”なイメージを払拭するための外交努力を託すには最適な人物。タクシン前政権の外交政策とは大きな変化がないこ

とを強調しているが、先進諸国との経済関係ではプミボン国王の提唱する「自足経済」の理念に配慮した政策にシフトする可能性がある(同[ニット]氏はタクシン前政権下でタイ米自由貿易協定[FTA]交渉のタイ側責任者だったが、今年1月に辞任している)。また、タクシン前首相とその“取り巻き企業”の利権構造がちらついた「エーヤーワディーチャオパヤー—メコン経済協力戦略(ACMECS)」や、国際社会にミャンマー軍政との対話の場を提供した「バンコク・プロセス」なども再検証されるとみられる。

▼データ：【年齢】65歳。【学歴】(米)ダートマス大学卒(文学士)。(米)ブラウン大学で文学修士号(政治学)取得。【経歴】1968：外務省入省。同省情報局国際部に勤務。69：東南アジア条約機構(SEATO)タイ代表団員(-72)。76：(ニューヨーク)国連代表部一等書記官、のち公使参事官。78：国連代表部次席大使。80：外務省情報局次長。81：政治局次長。82：特命大使(特別政治問題担当)。83：国際機関局長。87：国連代表部大使。96：駐米大使。2000：外務次官。01：定年退官。06：[10月9日](スラユット暫定内閣)外相。【家族】パトリシア(Patricia Osmond)、タイ名パッチャリン(Pacharin)夫人は米マサチューセッツ州生まれ。

【横顔】9月軍事クーデターの「ゴッドファーザー」といわれるプレム枢密院議長とは、パトリシア夫人が首相時代の同議長に英語を教授していたこともあり、現在まで親密な関係が続いている。*批判や質問に不寛容な面もあり、報道関係者には官僚的な態度が目立つとしてあまり人気がない。

□副外相

Deputy Foreign Minister

サワニット・コンシリ
Sawanit Kongsiri

ニット外相と同じキャリア外交官出身。外務省入省年次では外相よりも2年先輩。米国通の外相とは対照的で、大使としては欧州、中国、オセアニアに赴任した。入閣には、特に駐中国大使の経験が評価されたのは間違いない。また、経済局の局長を務めた経験がある点も外相とは異なる。(ニット)外相と(サワニット)副外相はお互いの得意地域・分野を相互補完するコンビといえる。

▼データ：【年齢】64歳。【学歴】(米)ワシントンD.C.)アメリカン大学で修士号(国際関係論)取得。【経歴】1966：外務省入省、のち情報局、経済局の各局長や外務次官補を経て、駐オーストリア大使(ハンガリー大使兼任)、国際原子力機関(IAEA)大

使、国連工業開発機関(UNIDO)大使、駐中国大使(北朝鮮大使、モンゴル大使を兼任)、駐オーストラリア大使(フィジー大使、バヌアツ大使を兼任)を歴任。2003：タイ赤十字社副専務理事(国際関係)。06：[10月9日](スラユット暫定内閣)副外相

■内相

Interior Minister

アーリー・ウォンアラヤ

Aree Wong-araya



4県の知事(内務省の任命制)を歴任し、内務次官にまで上り詰めた異色のイスラム教徒官僚という経歴を持ち、地方行政の専門家。定年退職後の2004年には、タクシン前政権の副教育相という「分野外」のポストに起用されたが、その主要な任務は、イスラム原理主義思想の浸透が進んでいるとされる最南部(ヤラー、パッターニー、ナラティワート3県)のイスラム教育機関を「正常化」することにあった。スラユット暫定内閣で現職に抜てきされたのも、第一にはイスラム武装勢力によるテロ攻撃が頻発する同地域の治安改善に手腕が期待されているからである。同時に、内務省の業務を知り尽くした地方行政テクノクラートとしての能力も評価された。

▼データ：【年齢】71歳。【生地】バンコク首都圏トンプリ。【宗教】イスラム教。【学歴】アサンプション・カレッジ卒、チュラロンコーン大学政治学部卒。1963：フィリピンの大学で修士号(地域開発学)取得。68：米国の大学で修士号(公共管理学)取得。【経歴】内務省入省(1961)、同省地域開発局勤務(一時期、フィリピンと米国で研修)。68：同省地方行政局(サトゥン、サラブリ、プラチンブリ、スパンブリ各県知事を歴任)。88：内務次官補。93：内務次官。95：定年退官、のちタイ高速道路公団(ETA)総裁。2004：[10月](第10次タクシン内閣)副教育相(←05年3月)。06：[10月9日](スラユット暫定内閣)内相。【歴任】タイ・イスラム銀行理事長、政府最南部問題諮問委員会委員。

【横顔】タクシン前政権で副大臣を務めてはいるものの、タクシン前首相の「天敵」ともいえるプレム枢密院議長を以前から尊敬しており、内務官僚から退任した後

は(副教育相在任時を除き)同議長が創設した財団の幹部を務めていた。*ヤラー県イスラム委員会のアブドゥラマー・ジェサー(Abdullahmae Jehsae)委員長は、内務次官時代の同(アーリー)氏が最南部のイスラム教徒住民の福祉向上に尽力したことを指摘し、「(同氏に)全幅の信頼を寄せている」と語っている。ただ、原理主義に洗脳された若者が主体とされるイスラム武装勢力が同委員長と同じ見方をしているかは疑問である。*息子の一人、エカポット(Ekkapot)氏は、2005年総選挙でタクシン前政権与党のタイ愛国党(TRT)から立候補(バンコク首都圏)し当選を果たしている。

□副内相

Deputy Interior Minister

バンヤット・チャンセーナ

Banyat Chansena

アーリー内相と同じく内務官僚出身。ヤラー、ソクラー各県知事を務めるなど、南部での勤務経験は20年以上におよび、同地域の行政に精通している。タクシン前政権が2002年に廃止した「南部国境県行政センター(SBPAC)」の最後の所長だった(内外の治安問題専門家の間では、前政権が同センターおよび同地域の「文民・国軍・警察(CPM)タスク・フォース」を廃止し、行政機関と治安機関の連携・協力関係を低下させたことが、イスラム武装勢力によるテロ攻撃の多発化に繋がったとの指摘がある)。スラユット政権では、SBPACの復活がすでに決定されており、その運営を含めた最南部問題の解決に手腕を発揮することが期待されている。

▼データ：【年齢】62歳。【生地】(南部)ソクラー県。【学歴】国立開発行政大学院大学(NIDA)で修士号(公共管理学)取得。【経歴】内務省入省。ヤラー県知事、ソクラー県知事などを経て、内務次官補(特命)、SBPAC所長、国土局長を歴任。定年退官。06：[10月9日](スラユット暫定内閣)副内相。

【横顔】プレム枢密院議長(ソクラー県出身)に近い点でもアーリー内相に似ている。

■法相

Justice Minister

チャーンチャイ・リキットチッタ

Charnchai Likitjitta

9月末に最高裁判所長官を最後に定年退官したが、その直後にスラユット暫定首相に現職就任を打診された。前政権下の法務省は、タクシン前首相の「右腕」で9月軍事クーデターの時には「首相代行」だったチットチャイ副首相兼法相(当時：退役警察

大将)と前首相の義弟、ソムチャイ・ウォンサワット(Somchai Wongsawas)次官(当時)によって恣意的に運営され、「政権に奉仕するための」法務行政機関と化していた。同省の内部でも、特別捜査局(DSI)の機密費乱用やIT機器調達プロジェクトに絡む汚職などの疑惑が渦巻いている。省内からの不正一掃が(チャーンチャイ)新法相に課せられた最初の任務といえる。

▼データ：【年齢】60歳(1946年4月25日生まれ)。【学歴】タマサート大学法学部卒。

【経歴】1995：南バンコク民事裁判所副所長。98：最高裁判所判事。2003：第一管区控訴裁判所長官。04：最高裁判所副長官。05：同長官。06：[9月]定年退官。06：[10月9日](スラユット暫定内閣)法相。

□副工業相

Deputy Industry Minister

ピヤブット・チャラウィチャー

Piyabutr Cholvijarn

副首相を兼任するコーシット工業相を補佐する。1998年までユニオン銀行一筋に勤務した銀行家で、1988年から10年間は同行頭取・最高経営責任者(CEO)。80-90年代に上院議員(任命制)を2期、国家立法議会議員(任命制)を1期務めている。タクシン政権で商業省、教育省の大臣政務官を務めたが入閣は初めて。

▼データ：【年齢】56歳(1949年11月15日生まれ)【生地】(北部)ランパーン県。【学歴】(英)ハンプシャー)セント・ジョンズ・カレッジ。(米)マサチューセッツ州)ウィルブラハム&マンソン・アカデミー。(米)ウィスコンシン大学卒(文学士：経済)。(米)コロンビア大学で経済学修士号(MA)取得。1990：タイ国防大学学位取得。【経歴】1976：バンコク・ユニオン銀行(国際部)入行。同行で要職を歴任。81：同行支店管理部長。84：同行取締役。88：同行頭取・最高経営責任者(CEO)。98：BVP社、タナサタパナ社など数社の会長・役員・顧問。03：[3月](タクシン政権)商業省政務官。[11月]教育省政務官。06：[10月9日](スラユット暫定内閣)副工業相。【歴任】1974：チュラチョムクラオ王立陸軍士官学校客員教官(←06)。96：タイ商工会議所理事・財政投資委員会委員長(←03)。02：タイ証券取引所(SET)顧問(←06)。【趣味】スポーツ、読書。【家族】スチンタナ(Suchintana)夫人との間に2子。

■商業相

Commerce Minister

クルッククライ・チーラペート

Krirkkrai Jirapaet



■運輸相

Transport Minister

ティーラ・ハオチャルーン(海軍大将)

Adm Thira Haocharoen



スラユット暫定政府の組閣では「サプライズ人事」の筆頭。元海軍司令官であり、軍人として有能な点は政界通の多くが認めても、運輸行政はほとんど“素人”とみなされている。タクシン前政権は複数の運輸関連メガ・プロジェクトを実施し、計画中的のものもあるが、スラユット首相は利権構造が付き纏うこれらのプロジェクトの検証・検討を行うに当たって、運輸省のトップにはテクノクラートではなく、気心の知れた“軍人仲間”を起用した。技術的な不備や汚職問題がクローズアップされているスワンナプーム空港(バンコク新国際空港)を就任直後に視察するなど早速行動力を示したが、同空港のテロ対策の不備を第一に指摘し、警備当局者に改善案の提出を命令するなどやはり“軍人らしさ”を発揮している。

▼データ：【年齢】66歳(1940年4月6日生まれ)。【学歴】1963：海軍士官学校卒。【経歴】1963：海軍入隊(海軍少尉に任官)。様々な要職を歴任。86：駐米大使館駐在武官(ワシントンD.C.)。90：海軍司令部官房長。92：海軍士官学校副校長。93：海軍大学校長。94：海軍参謀長補(兵站担当)。95：海軍副参謀長。96：海軍参謀長。97：海軍副司令官。98：[10月]海軍司令官。2000：[9月]定年退役。06：[10月9日](スラユット暫定内閣)運輸相。

【横顔】スラユット内閣には、首相と同じく高校教育をキリスト教系の聖ガブリエル・カレッジで受けた「ガブリエル閥」ともいべき閣僚が多く、同(ティーラ)氏もその一人である(同閥には、他にプリディヤトン副首相兼財務相、クルッククライ商業相、ブンロート国防相、スウィット観光スポーツ相らがいる)。

□副運輸相

Deputy Transport Minister

サンサーン・ウォンチャウム

Sansern Wongcha-um

首相直属機関で国家経済開発計画を策定

経済協力や貿易交渉の専門家であり、アジア太平洋経済協力会議(APEC：1989年)、世界貿易機関(WTO：95年)、アジア欧州会議(ASEM：96年)など主要な国際機構の創設にタイ代表の一人として参画した。01年のタクシン前政権の成立後に、商業省次官から首相顧問に異動になったが、05年には国際貿易開発研究所(国連貿易開発会議[UNCTAD]とタイ政府の共同プロジェクトとして2002年に設立)の所長に就任。この間にも、政府の貿易交渉に関与し、タイ政府と欧州自由貿易連合(EFTA)との交渉ではタイ代表団長を務めた。暫定内閣への入閣は、そうしたテクノクラートとしての能力を高く買ってきたプリディヤトン副首相(経済担当)兼財務相の強い推薦があった。

▼データ：【年齢】63歳(1943年5月10日生まれ)。【生地】バンコク。【学歴】1966：チュラロンコーン大学政治学部卒(優等)。71：豪シドニー大学で経済学修士号(MA)取得。73：日本で開発経済学学位取得。75：英オックスフォード大学でプロジェクト評価課程修了(学位)。79：フィリピンでプロジェクト策定・管理課程(学位)。【経歴】1967：首相府技術経済協力局(DTEC)入局(-82)。81：国営タイ通信社(TNA)ディレクター。82：商業省官房課長。84：同省商業経済局次長。88：外国貿易局次長。90：商業次官補(貿易交渉担当)。93：商業経済局長。95：世界貿易機関(WTO)タイ代表部大使。99：[10月]外国貿易局長。2000：[10月]商業省次官。01：[10月](タクシン)首相顧問。03：[3月]観光スポーツ省政務官。05：[3月]国際貿易開発研究所所長。06：[10月9日](スラユット暫定内閣)商業相。【歴任】1996：WTO貿易投資作業部会議長(-98)。99：WTO地域貿易協定作業部会議長。2000：東南アジア諸国連合(ASEAN)経済問題高級事務レベル会合議長(-01)。タイ中央銀行金融政策委員会委員。【趣味】ゴルフ。【家族】カンチャナ(Kanjana)夫人との間に2男。

【横顔】(9月クーデター後に一時暫定政府の首相候補として名前が挙がった)スパチャイ・パニッチャパク氏が発展途上国初のWTO事務局長(任期：2002-05)に選出されるための根回しに尽力した。

する国家経済社会開発委員会(NESDB)の有能なスタッフとして知られ、事務局長にまで上り詰めたが、2002年に定年まで6年を残して早期退官したことで話題を呼んだ。「もっと多くの時間を家族と過ごしたかったから」が表向きの理由だが、タクシン首相(当時)とソリがあわず、政治的な圧力が加わったとみられている。大量輸送・物流システム構築の専門家で、特に交通渋滞の緩和策やエネルギー消費の抑制などに手腕を発揮することが期待されている。“軍人閣僚”のティーラ運輸相をその豊富な経験と専門知識で補佐する。

▼データ：【年齢】58歳(1948年1月29日生まれ)。【学歴】タマサート大学経済学部卒。(米コネティカット州)ブリッジポート大学でMBA(経営学修士号)取得。【経歴】国家経済社会開発委員会(NESDB)事務局次長。同事務局長。【趣味】ゴルフ、テニス。

<お詫びと訂正>

前号(2006年10月15日号)の「《ミャンマー》2006年の新任閣僚：プロフィール」中の(参考)欄の文末が「②キン・マウン・ウィン副国防」となっており、文章が途中で切れています。正しくは「②キン・マウン・ウィン副国防相ら副大臣8人と最高裁判事1人の『引退を許可』。」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

<追加情報>

また、同じ記事のソー・ミン新第一電力相のプロフィールで第一・第二電力省の所管局・公社などの詳細を紹介してありませんでした。その後の調査で各省の所管局・公社は下記の通りであることが判明しました。

◎第一電力省

主要な業務：水力発電所の建設計画、実施および補修。

・水力発電計画局・水力発電実施局・水力発電公社

◎第二電力省

主要な業務：水力発電所以外の発電所の建設、電力の送電・配電網の整備、電力供給。

・発電局・ミャンマー電力公社・ヤンゴン市電力供給委員会・電力供給公社

(アジア・リンケージ 勝田 悟)